

## 関連性理論の視点

加 藤 雅 啓\*  
(平成7年10月31日受理)

### 要 旨

本稿では、英語の法助動詞の意味に関する問題点を関連性理論の枠組みを用いて分析した Groefsema (1995), および文文法で扱うのは困難である「橋渡し指示 (bridging reference)」を関連性理論の枠組みで分析した Matsui (1993) の論考を取り上げ、情報伝達と認知に関する理論である関連性理論が言語現象の分析にどれほどの射程を持つのか明らかにする。

### KEY WORDS

bridge reference      橋渡し指示      modals      法助動詞  
principle of relevance      関連性の原理      relevance theory      関連性理論

## 1. 関連性理論と文文法

### 1.0 はじめに

Sperber and Wilson (1986) (以下, S&W)で提案された関連性理論 (Relevance Theory) は、関連性理論そのものの理論研究に加え、最近ではその枠組みを用いて様々な言語現象の分析をした研究も報告されている。本稿は、これらの議論のいくつかを紹介し、その論点を取り上げて検討する。第1節では、従来、文文法で論じられてきた英語の法助動詞の意味に関する問題点を関連性理論の枠組みを用いて分析した Groefsema (1995) の論考を検討する。第2節では、文文法で扱うのは困難であるとされている「橋渡し指示 (bridge reference)」を関連性理論の枠組みで分析している Matsui (1993) の論考を取り上げて論じる。

### 1.1 英語の法助動詞

#### 1.1.1 多義性に基づく分析

英語の法助動詞の法性 (modality) に関しては、一般的に認識的法性 (epistemic modality)、義務的法性 (deontic modality)、および動的法性 (dynamic modality) の三つの法性に分類される。<sup>1</sup>概略、認識的法性は話し手自らの知識に基づく可能性、必然性、蓋然性、確実性を表し、義

---

\*言語系教育講座

務的法性は義務、許可の意味を表し、動的法性は主語の特性(能力、意志、傾向など)、事柄の可能性・必然性などの意味を表す。英語における法性を表す表現は法助動詞以外にも、possibly, probably, maybe, certainlyなどの法副詞、be possible, be certain to, be likely toなどの法形容詞、あるいはbe able to, be going to, be willing toなど様々な表現がある。英語の法助動詞とその他の法表現の間には際だった違いがある。それはその他の法表現が上記の三種類の法性のうち何れか一つしか表せないのになし、法助動詞のほとんどが各々二種類、あるいは三種類の法性を表すことができることである。このような法助動詞の多義性に着目して英語の法助動詞を分析する立場を一般に「多義性に基づく分析 (polysemy view)」と呼んでいる (Palmer (1979, 1990), Quirk et al. (1985))。すなわち、多義性に基づく分析では、各法助動詞が表す各種の意味(法)はそれぞれの別個の独立した意味であり、その間には相互の関連性を認めない立場をとる:

- (1) Mary may leave tomorrow.
  - (a) It is possible that Mary leaves tomorrow. [認識的法性]
  - (b) Mary is permitted to leave tomorrow. [義務的法性]
- (2) John should be at work.
  - (a) It is probable that John is at work. [認識的法性]
  - (b) John is obliged to be at work. [義務的法性]
- (3) Ann must be in court.
  - (a) It is certain that Ann is in court. [認識的法性]
  - (b) Ann is obliged to be in court. [義務的法性]
- (4) John can drink a whole pint in one go.  
= John is able to drink a whole pint in one go. [動的法性]
- (5) Sue can go to the party.
  - (a) Sue is permitted to go to the party. [義務的法性]
  - (b) It is possible for Sue to go to the party. [認識的法性]

(Groefsema (1995: 53-4))

### 1.1.2 核意味に基づく分析

多義性に基づく分析には次のような問題点が存在することが、Palmer(1979, 1990), Lyons(1977), Groefsema(1995)等で指摘されている:

#### 多義性に基づく分析の問題点 (i)

法性の範疇を細かく分類しても、その法性の種類・程度と法助動詞の意味の違いとの間に、一対一の対応を示さない例がある。たとえば、canの基本的な意味はability, possibility, permissionの三つが仮定されているが、このうちどれと決定できない例がある。Palmer(1990: 85)は、(6)のcanは「贈り物を受け取ることを避ける能力 (the person's ability to avoid receiving a present)」を意味するのか、あるいは「そうする可能性 (the possibility of doing so)」を意味するのか明確ではない、と指摘している:

- (6) One thing you want to avoid, if you possibly can, is a present from my moter.

(Palmer (1990: 85))

多義性に基づく分析の問題点 (ii)

異なる法性が完全に融合(merge)して、法助動詞の意味の区別ができない例がある。次の(7)では、認識的法性と義務的法性が融合し、(8)では、根源的用法と認識様態の用法が融合している:

(7) The successful candidate will be a woman in her mid thirties of demonstrated ability.  
(Lyons (1977: 846))

(8) It is important to note that where high concentrations are theoretically possible in the plant evaporator, the time required to build them may be considerable.  
(Coates (1983: 145))

多義性に基づく分析の問題点 (iii)

法助動詞に与えられた意味の何れにも該当しないような用法が存在する:

- (9) You must come to dinner sometime.  
a. It is necessary that you come to dinner sometime.  
b. You are obliged to come to dinner sometime.  
c. We would like you to come to dinner sometime. (Groefsema (1995: 57))

(9)における must の意味は (9a) の動的法性 (必要), (9b) の義務的法性 (義務), 認識的法性 (推量) 等の何れの意味とも異なり, 勧誘の意味 (9c) と解釈されるのが普通である。しかし, この意味は法助動的 must の持つ基本的な意味ではない

このような多義性に基づく問題点をふまえ, 最近の意味論的法助動的の研究においては, 各法助動的の表す各種の意味はそれぞれ別個の独立した意味ではなく, これらの間に密接な関連性を認め, それぞれの法助動詞には単一の基本的意味を想定する仮定が提案されている。すなわち, 各法助動詞に単一の基本的意味を想定し, その認識的法性, 義務的法性, および動的法性はこの基本的意味と文脈との相互作用によって派生的に導かれるとする立場である (Kratzer(1977), Perkins(1983), Tregidgo(1982), Kinge(1993), 中野(1993), Groefsema(1995))。このような分析の仕方を「核意味分析 (core meaning analysis)」(Tregidgo(1982), 中野(1993)), あるいは「統一の意味に基づく分析 (unitary meaning view)」(Groefsema (1995)) と呼んで多義性に基づく分析と区別している。<sup>2</sup>

## 1.2 英語の法助動詞と関連性理論

助動詞の核意味分析の研究, 例えば Ehrman(1966)等では, 各法助動詞動に「基本的意味 (basic meaning)」と呼ばれる核意味を設定し, 法助動詞が用いられる個々の場面に応じた意味はこの核意味に「付帯の意味 (overtone)」が付け加わって導かれる, と考えられていた。しかし, 中野(1993: 185), Groefsema(1995: 60)で指摘されているように, Ehrman の主張には, 基本的意味に文脈に依存した付帯の意味がどのうよにして付け加わるのか, ということを明示的に示す手段が明らかにされていなくてという不備がある。Groefsema(1995)は核意味分析の立場に立つ Kratzer(1977, 1981), Kinge(1993)らの分析を次のように総括している:

The intuition that is shared by the different proposals for unitary meanings of the modals is that full interpretation of utterances containing modals depends on the interaction between these unitary meanings and assumptions in the context of the

utterance.

(Groefsema (1995: 60-61))

これは法助動詞を含む発話の解釈は、法助動詞の核意味と発話の場面における想定 (assumption) との相互作用によって決定される、ということを述べたものである。

### 1.3 Groefsema(1995)の核意味分析

Groefsema(1995)の分析は英語の法助動詞 can, may, must, should を取り上げ、それぞれの核意味を規定する一方で、文脈における法助動詞解釈の過程において、どのような想定(assumption)の集合が想起されるのかということに関して、関連性理論の立場から一定の制約を課すものである。Groefsema(1995)は法助動詞解釈における関連性理論の果たす役割について、S&Wを援用して次のように述べている。コミュニケーションには言語的記号化と解読 (linguistic coding and decoding) が関与するが、発話の言語的意味は話者に伝えたい意図を言語化するには不十分である。話者の話を言語的に解読して得られる意味内容は、話者の伝えたい意図の一部としか聞き手には映らない。すなわち、このようにして得られる意味内容は不完全な論理形式 (incomplete logical form) でしかなく、これを聞き手は話者が伝えようと意図していた完全な命題に仕上げる必要がある。このプロセスは語用論的なプロセスである。すなわち、この論理形式の不完全な部分にコンテキストから得られる値 (values from the context) を与えることによって完全な論理形式、すなわち文の命題を得ることができる。このコンテキストから得られる値付与は関連性の原理 (principle of relevance) にしたがって行われる。<sup>3</sup>英語の法助動詞を含む文を言語的に解読して得られた出力は、その法助動詞の核意味と関連性の原理に従って富化 (enrich) された意味を含む論理形式である、と述べている (Groefsema (1995: 61-62))。Groefsema(1995)は英語の法助動詞 can, may, must, should の核意味を次のように定義している:

- (10) Can:  $p$  is compatible with the set of all propositions which have a bearing on  $p$ .  
 May: There is at least some set of propositions such that  $p$  is compatible with it.  
 Must:  $p$  is entailed by the set of all propositions which have a bearing on  $p$ .  
 Should: There is at least some set of propositions such that  $p$  is entailed by it.  
 (where  $p$  is the proposition expressed by the rest of the utterance)

(Groefsema (1995: 62))

(10)で規定されている法助動詞の核意味は、概略、i) can の核意味: 命題  $p$  と関係を持つすべての命題の集合と両立する。ii) may の核意味: 命題  $p$  と両立するような命題の集合が少なくともいくつか存在する。iii) must の核意味: 命題  $p$  と関係を持つすべての命題の集合に命題  $p$  は含まれる。iv) should の核意味: 命題  $p$  が包含されるような命題の集合が少なくともいくつか存在する。ここで「関係を持つ (bearing on)」という概念は、i) 命題  $Q$ , ないし命題  $\neg Q$  が命題  $P$  から導かれ場合で、その場合に限って命題  $P$  は命題  $Q$  と関係を持つ。ii) 命題  $P$ , および命題の集合  $X$  のみから導かれることはなく、また、命題の集合  $X'$  と命題  $P$  から導かれることはない場合で、その場合に限って命題  $P$  は命題  $Q$  と関係を持つ(ここで  $X'$  は命題の集合が  $X$  からある特定の文を除外したものを示す)、と説明されている (Groefsema (1995: 62))。

例えば、いま命題  $P = \text{'I'm working'}$ 、命題の集合  $\{X_1 = \text{'If I'm working, I don't want to be disturbed.'}, X_2 = \text{'If I don't want be disturbed, I put a sign on my door.'}\}$ 、命題  $Q = \text{'I put a sign on my door.'}$ があるとすると、命題  $P$  と命題  $X$  から命題  $Q$  に導かれる。したがって、この場合、命題  $P$  は命題  $Q$  と関係を持つという。

### 1.3.1 *can* と *may* の解釈

*can* の核意味からどのようにして *can* の多義的な解釈が導かれるので、次の例で見てみることにしよう。<sup>4</sup>これは家を建築中の職人がその日のスケジュールを話し合っているという場面での発話である:

- (11) A: Who is doing what?  
 B: The painters can paint the doors. (Groefsema (1995: 63))
- (12) a. [<sub>p</sub> the painters paint the doors] is compatible with the set of all propositions which have a bearing on *p*.  
 b. [<sub>p</sub> the painters(123) paint the doors(789)day(51)] is compatible with the set of all propositions which have a bearing on *p*.

(10) で規定されている *can* の核意味 (11B) にあてはめて得られた (不完全な) 論理形式が (12a) である。これにどのペンキ屋がどのドアをいつ塗るのかといった指示 (reference) を与えることによって富化(enrich)されて得られた論理形式が(12b)である。これによって聞き手は富化された命題  $p$ [<sub>p</sub> the painters(123) paint the doors(789)day(51)] と関係を持つ総ての命題に注意を向ける。例えば、ペンキ屋はペンキを塗る能力を持ち、ドアはペンキを塗る準備ができていて、ペンキを塗る作業は他の作業のじゃまにならない。あるいはペンキと刷毛は用意されている、等々の命題を提起し、聞き手は (11B) を「ペンキ屋は今日にドアにペンキを塗ることが可能である。」と解釈する。この解釈は、(13)のような想定とともに (14)の文脈含意をもたらすことから、最適の関連性を達成している解釈ということが出来る:

- (13) if the painters paint the doors today then the carpets can be laid tomorrow.  
 (Groefsema (1995: 64))
- (14) The carpet can be laid tomorrow. (Groefsema (1995: 64))

次に *may* を含む文の解釈について考えてみることにする。次の発話はジョンがアンとブルースの家を訪問し、タバコを取り出した時のものである:

- (15) a. May I smoke in here? (Groefsema (1995: 66))  
 b. John is asking whether (there is at least some set of propositions such that [<sub>p</sub> John smoke in room(5)at time *t*] is compatible with it).

(15a)の発話から *may* の核意味に応じて(15b)の論理形式が導かれる。*may* の核意味は、*can* とは異なり、聞き手に対して命題  $P$  について存在する総ての命題を考慮することは求めず、あ

る特定の命題（証拠（evidence））を探すように聞き手に求める。聞き手であるアンとブルースの手の内にある命題 P と両立する唯一の命題（証拠）は、ジョンの喫煙を許可するということであり、この場面ではこの解釈のみが文脈効果を持つことになる。この例から明らかなように、may を用いた疑問文は常に許可を求める文と解釈される。これは may を用いることによって聞き手に一つの命題（証拠）を満たすように求めるからで、話し手には不可能だが聞き手には満たすことができる唯一の命題（証拠）は許可を与えることであるからである。

### 1.3.2 *must* と *should* の解釈

*must* の多義的な意味が (10) で規定された核意味からどのようにして導かれるのか、次の例で考えてみることにしよう。アンとメアリーが引っ越した郊外の新居にジョンが訪ねてきて、家や庭などを案内された場面でのジョンの発話である：

- (16) a. You must be very happy living here.  
 b. [<sub>p</sub> Ann and Mary be very happy living here (23)] is entailed by the set of all propositions that have a bearing on *p*. (Groefsema (1995: 69))

(16a) の発話から *must* の核意味にしたがって (16b) の論理形式が導かれる。これによって聞き手であるアンとメアリーは、話し手であるジョンの心の中に存在していると思われる命題 P (= [<sub>p</sub> Ann and Mary be very happy living here (23)]) を彼が口を出して言うに足るだけのあらゆる命題（証拠）、例えば美しい家と庭を持つ人はその暮らしに幸せを感じている、さらにジョンは彼らの家や庭を美しいと思っている、という証拠に注意を向けることになる。命題 P と関係を持つこれらの総ての命題の集合 X に命題 P は包含される。すなわち、命題 P は必ず命題の集合 X から導かれることになる。したがって、聞き手は *must* を認識的法性の意味（～にちがいない）と解釈するのである。この解釈は、例えばジョンが彼らの新居を気に入っているかもしれないという聞き手の弱い想定を強化する、という意味において関連性を持つものである。次は *should* の例である。母親が息子のビルに次の (17) のように言ったとしよう：

- (17) a. You should go and see your grandmother.  
 b. There is at least some set of propositions which entails [<sub>p</sub> Bill go and see grandmother at time *t*].  
 c. You must to and see your grandmother. (Groefsema (1995: 71))

(17a) の発話から (10) で規定された *should* の核意味に応じて (17b) の論理形式が導かれる。聞き手であるビルは命題 P を包含するような命題（証拠）に注意を向ける。この発話は母親によってなされたものであるから、「ビルに対する母親の権威」という想定は彼にとって容易に想起でき、息子のビルはこの想定を命題 P を包含する命題（証拠）、すなわち [<sub>p</sub> Bill go and see grandmother at time *t*] を言うに足るだけの証拠として解釈する。これによって (17a) における *should* の義務的法性の意味が導かれる。ただし、ここでは母親は「命題 P を包含する何らかの命題（証拠）がある」と言っているだけで、「総ての命題（証拠）が命題 P を包含する」ことを意味する *must* を用いた (17c) より強制力は弱いことになる。

#### 1.4 Groefsema (1995) の問題点

英語の法助動詞の意味に関する Groefsema (1995) の分析は, Kratzer (1981), Perkins (1982), 中野 (1993) らの核意味分析と同様, 各法助動詞の間に認められる語義間の関係を体系的に表すことができ, また法助動詞の語義の歴史的発達を体系的に述べる手段を与える, 等の長所を認めることができる。しかしながら, その分析の細部においては問題がないわけではない。本稿では, 以下, Groefsema (1995) における問題点のうち, i) 核意味の定義上の不備, ii) 核意味の妥当性についてみていくことにする。

##### 1.4.1 核意味の定義の矛盾点

Groefsema (1995) は can, および must の核意味を次のように定義している:

- (10) Can:  $p$  is compatible with the set of all propositions which have a bearing on  $p$ .  
 Must:  $p$  is entailed by the set of all propositions which have a bearing on  $p$ .  
 (Groefsema (1995: 62))

ここで問題となるのは, can, および must の何れの定義にも「命題  $P$  と関係を持つ総ての命題の集合」という規定が明記されていることである。これは can, あるいは must を解釈する際には, 聞き手は命題  $P$  と関係を持つ総ての命題の集合に注意を払わねばならないことを含意する。実際, Groefsema は, (12b) の論理形式の解釈では, “What this logical form then does is focus the attention of the addressee on all the propositions which have a bearing on  $p$ , such as that the painters have the ability to paint, that the doors are ready for painting, … (Groefsema (1995: 64))” と述べ, (16b) の論理形式の解釈の際には, “This encourages Ann and Mary to focus on all the evidence for the proposition  $p$  that John may have in mind, such as that people who have beautiful houses and gardens are happy living in them, … (Groefsema (1995: 69))” と述べて, 聞き手に対し命題  $P$  に関わりのある総ての命題 (証拠) に注目するように求めている。

しかしながら, このような規定の仕方は関連性理論の基本的概念の一つである「最適な関連性の見込み (presumption of optimal relevance)」の後半部 (18b) に反している:

- (18) Presumption of optimal relevance  
 a. The set of assumptions  $\{I\}$  which the communicator intends to make manifest to the addressee is relevant enough to make it worth the addressee's while to process the ostensive stimulus.  
 b. The ostensive stimulus is the most relevant one the communicator could have used to communicate  $\{I\}$ .  
 (Sperber and Wilson (1986: 164))

(18b) は「ある解釈を他の解釈よりも関連性のあるものにする要因の一つは, それにかかる処理労力が少ないということである」ということを述べたものである。このことをふまえた上で S&W は次のように述べている:

When the communicator has an unbounded range of stimuli to choose from, it follows from the second part of the presumption of relevance that of all the interpretations of the stimulus which conform the presumption, it is the first interpretation to occur to the addressee that is the one the communicator intended to convey.

(Sperber and Wilson (1986: 168-169))

これは「伝達者が無限の範囲の刺激から選べる場合には、関連性の見込みを確認する刺激のあらゆる解釈の中で、伝達者が伝えようと意図していたのは聞き手が思いつく最初の解釈である（内田他訳（1993: 206）」ということ、すなわち関連性の原則に合う最初の解釈が最適な解釈であることが関連性の見込みの後半部から導かれることを示している。Groefsema (1995) における法助動詞の定義では、can, および must の解釈の際、聞き手に対し命題 P に関わりのある総ての命題（証拠）に注目するように求めているが、これは「最適な関連性の見込み（18 b）」と矛盾する規定の仕方であることは明らかである。

#### 1.4.2 核意味の妥当性

法助動詞 can, あるいは may が平叙文で「許可」の意味に用いた場合、両者の間で相手に対する丁寧さの程度が異なることが知られている。Groefsema (1995: 68) では、これを (10) の定義における特定性 (specificity) から導くことができる、と述べている。すなわち、can では「相手の許可」は命題 P と矛盾しない総ての命題の一部に過ぎないが、may の場合、命題 P の真偽は「相手の許可」如何にかかっている。このため may のほうが相手の立場をたてることになり、結果としてより丁寧な表現ということになる。したがって、Groefsema (1995) における法助動詞 can, および may の定義 (10) から、同じ命題を表す平叙文の場合、may を用いたほうが can を用いるより、常により丁寧な表現となる、という論理的帰結が導かれる。しかし、この主張は言語事実とは異なる。次の例を見てみよう：

(19) You may take it from me that it won't last another week. (それは、あと 1 週間ももたないだろう。私の言うことを信じなさい。) (Declerck (1991: 369))

(20) a. You cannot smoke in this compartment.  
b. You may not watch that programme! (Declerck (1991: 373))

(19) では、may は軽い命令の意味を表し、(20a, b) では、may not は cannot よりも尊大な感じを与える。このことについて Declerck (1991: 369) では、“In statements, the meaning of *may* for permission, (= ‘I allow you to...’) can easily shift to that of a suggestion or weak imperative.”とあり、平叙文の場合、may の「許可」の意味は軽い命令の意味に移行しやすいと述べられている。とくに you may で始まる平叙文は、あまり丁寧な感じを受けないので、通例用いられない。さらに、許可が与えられていないことを表す cannot, あるいは may not については、前者が「～する事は許されていない」という一般的な意味であるのに対し、後者は個人的色彩が強く不快であり、尊大で、あまり丁寧な印象は与えない (Declerck (1991: 373)) とされている。

Groefsema (1995) が主張するように、can と may の丁寧さの相違が (10) の定義から導かれる



とするならば、(19)、(20)に見られる丁寧さの違いも同様に導かれるはずである。しかし、一方では may のほうが can より丁寧であり、他方では can のほうが may より丁寧であるという全く正反対な結論を同一の定義からのみ導くようなことは、ad hoc な議論であるというそしりを免れない。そもそも意味的には周辺的である「丁寧さの度合い」というような概念を法助動詞の核意味の定義の盛り込むということは、核意味分析の本来的に意義からは逸脱した考え方である。このような概念は核意味として規定するよりは、むしろ文脈における法助動詞解釈の過程において、文脈効果と関係づけて論ずるべきであると思われる。

## 1.5 ま と め

Groefsema (1995) の分析は英語の法助動詞 can, may, must, should を取り上げてそれぞれの核意味を規定し、文脈における多義的な意味の解釈はこの核意味と関連性理論における「関連性の原理」、および「最適な関連性の見込み」から導くことができる、というものである。この分析の細部には1.4.2で論じたこと以外にもいくつかの問題点が残されている。例えば、法助動詞の意味は「発話の力+命題」という発話の意味構造の観点から見た場合、「主語指向性 (subject orientation)」、「話者指向性 (speaker orientation)」、「命題指向性 (proposition orientation)」等の意味を表す。ところが Groefsema (1995) はこのような法助動詞の意味の一部である指向性の問題について全く論じていない。

しかしながら、核意味分析と関連性理論の枠組みを用いることによって、文脈に応じて多彩な意味を示す英語の法助動詞の意味解釈に関して、原理に則った説明を与えることができることを例証した Groefsema (1995) の論考は評価されるべきであると思われる。

## 2. 関連性理論と談話文法

### 2.1 橋渡し指示

次の発話では、ワインリストがどりレストランのものか明示されていないにも関わらず、それは話者が出かけたレストランのものであると解釈するのが最も自然である：

(21) I went to a restaurant. The wine list was exclusively French.

(Matsui (1993: 50))

なぜこのような解釈ができるのであろう。Matsui (1993) は、(21) の解釈には統語的・意味的情報の記号化 (encoding) と解読 (decoding) だけでなく、話者の意図した指示対象 (referent) を同定するために語用論的推論が用いられているとし、このような語用論的推論を Clark and Haviland (1977) にならって橋渡し推論 (bridging implicature) 呼び、次のように定義している：

(22) I call this type of new assumption, which is indispensable for identification of the intended reference, a bridging implicature. (Matsui (1993: 51))

橋渡し推論とは、話者の意図した指示対象を同定するたにに必要な文脈から新たに導かれた想定である、ということができる。Matsui(1993)は、さらに橋渡し推論を用いて橋渡し指示(bridging reference)を次のように定義している:

- (23) By 'bridging reference', I mean the definite noun phrase whose referent is identified by use of bridging implicature. (Matsui (1993: 51))

(23) は、その指示対象が橋渡し推論を用いることによって同定される定名詞句表現を橋渡し指示と規定したものである。

Matsui (1993) は橋渡し指示を関連性理論の枠組みで分析したものである。その概略を (21) の例を用いてみることにする。橋渡し指示の指示付与においても最も重要な要因は文脈(context)である。聞き手は文脈から適切な指示対象を選択することになるが、その際、次の3つの問題を考慮しなければならない: 1) 聞き手にとって利用できるのはどのような文脈か。2) その文脈はどのようにして入手するのか。3) 聞き手は適切な指示対象を含む正しい文脈をどのようにして選択するのか。

第一の問題について考えてみよう。我々はある発話を解釈する際、直前の発話を解釈して短期記憶に蓄えられた想定を利用するが、(21)の第一文には wine についての明示的な言及がないので、第2文の wine list を解釈するには直前の文脈、すなわち第1文の字義通りの解釈だけでは不十分である。そこで聞き手は橋渡し推論(22)によった文脈を拡張し、次のような橋渡し想定(bridging assumption)を導く:

- (21') The restaurant the speaker went to had a wine list. (Matsui (1993: 64))

したがって、聞き手にとって利用できる文脈とは、橋渡し推論によって新たに導かれた想定(21')を含む文脈である。

次に第二の問題である文脈の入手方法、すなわち聞き手はどのようにして橋渡し想定(21')を得ることができるのかということについて考えてみよう。関連性理論では、個々の想定は「概念(concept)」という小さな単位から構成される。例えば、(21)の第一文は、'I', 'go', 'restaurant' 等の概念から構成される。個々の概念は論理的記載事項(logical entry)、百科事典的記載項目(encyclopaedic entry)、および語彙的記載項目(lexical entry)の3種類の記載項目として長期記憶に蓄えられる。いま問題となっているのは百科事典的記載項目である。例えば'restaurant'の百科事典的記載項目は「レストランはものを食べる場所」、「レストランにはメニューやワインリストがある」等の想定の集合を含む。(21)の発話を聞いた聞き手は'restaurant'と'wine list'の百科事典的記載項目から「レストランはワインリストを用意しているかもしれない」という一般的な想定を導き、さらに「話し手が出かけたレストランにはワインリストが用意されていた」という特定の想定を導く。このようにして得られた橋渡し推論によってワインリストの同定が可能になるのである。

最後に第3の問題を考えてよう。(21)の発話を聞いた聞き手はこれまで述べてきたプロセスを経て(21')を含む文脈を手に入れ、このなかに話者の意図した指示対象(=話者が出かけたレストランのワインリスト)を見いだすことができる、と考えるのはきわめて自然な帰結であ

る。しかし、‘the wine list’を耳にした聞き手は‘wine list’の百科事典的記載項目から (21’) 以外の文脈、例えば「ワインリストのあるレストランは高級である」と呼び出すことも原理的には不可能ではない。それでは、なぜ聞き手はこの文脈を呼び出すことはしないで (21’) の文脈を選択したのか。その答えは関連性理論の「関連性の原理」と「最適な関連性」の定義から導くことができる (注3参照)。

「関連性の原理」から聞き手は (21) の発話を最適な関連性がある、すなわちできるだけ少ない労力でできるだけ多くの文脈効果を得ることができる発話として解釈する。いま、話者は *the wine list* という定名詞句表現を用いて特定のワインリストを想定して発話している。したがって、聞き手はそのワインリストは特定のレストランのものである、と推測するはずである。ここで聞き手にとって最も少ない労力で呼び出すことのできる文脈は「そのワインリストは話者が言及したレストランのものである」ということになる。すなわち、(21’) の橋渡し想定こそが聞き手にとって最小の労力で最大の文脈効果をもたらす文脈なのである。このことに関して Sperber and Wilson (1986: 168) は “the first interpretation consistent with the principle of relevance was the best hypothesis. All other interpretations would manifestly falsify the second part of the presumption of relevance.” と述べ、関連性の原理に合致する最初の解釈が最適な解釈であるということを描している。(21) の例では、(21’) 以外の文脈を呼び出すことは不可能ではないが、それは聞き手に必要以上の処理労力を課すことになり、結果として最適な関連性に違反することになるために排除されるのである。

## 2.2 Matsui (1993) の問題点

Matsui (1993) は、既存の理論ではどちらかというと周辺的な問題として扱われてきた橋渡し指示の問題を取り上げ、それを関連性理論の枠組みを用いて分析し、新たな提案を行っているという点で評価できるものである。しかしながら、関連性理論を適用する際の適用方法の細部についてはいくつかの不明瞭な点を残している。ここでは、文脈の呼び出し可能性 (accessibility) に限って考えることにする。

いま、かりに橋渡し指示付与を行う際、二つ以上の可能な先行詞がある場合を考えてみよう:

- (24) a. I moved from Earl’s Court to Ealing. The rent was too expensive.  
b. I moved from Earl’s Court to Ealing. The rent was less expensive.

(Matsui (1993: 59))

(24a) では、the rent は Earl’s Court の家賃を指し、(24b) では Ealing の家賃を指すと解釈される。Sperber and Wilson (1986: 167-169) によれば、最も呼び出し可能性の高い候補から先に検証されることになるが、(24a)、(24b) ではどのようにしてこの「呼び出し可能性」の順位を決定するのか述べられていない。仮に (24a) で Earl’s Court を最初に呼び出した場合、これは関連性の原理に合う解釈であるので容認される。(24b) でも同様の手続きがとられ、Earl’s Court を最初に呼び出した場合、得られた解釈は関連性の原理に合わないので廃棄され、改めて Ealing を呼び出す。このようにして得られた解釈は (24a) の解釈に比べてより多くの処理労力を費やしているため、最適な関連性の見込みを達成することはできず、結果として関連性の低い解釈と査定されるはずである。しかし、実際はこの解釈も (24a) の解釈同様、十分に関連性

の高い解釈である。また、仮に近接性 (proximity) の観点から、the rent の指示対象として Ealing を最初に呼び出した場合、今度は (24a) の解釈が (24b) の解釈より関連性が低いという誤った査定をしてしまえことになる。

このように Matsui (1993) の分析には「呼び出し可能性」については明確でないところが残されている。これに関してすぐに思いつく要因は、例えば、統語上の位置関係、主題関係、間接性等々を挙げることができる。今後の関連性理論の研究では、関連性の原理の適用が恣意的である、という非難を招かないためにも、これらの要因が「呼び出し可能性」に対してどれほどの影響力を行使するのか、具体的な議論を積み重ねていかなければならない。<sup>5</sup>

\*本研究は、文部省科学研究費補助金一般研究 (C)、課題番号 No. 07610462 の援助を受けてなされた研究の一部である。また、本研究は上越教育大学情報処理センター JUEN SYSTEM の支援を受けている。

## 注

1. 英語の法助動詞の法性 (modality) に関しては、認識様熊の法性 (epistemic modality) と根源的法性 (root modality) の二つの法性に分類する立場もある (Declerck (1991))。認識様熊の法性は、命題の真偽の度合いに関するものであり、蓋然性・可能性・非蓋然性などを表す。一方、根源的法性は命題の真偽に関するものではなく、行為、状態、家庭、出来事などの事柄の生起を問題とするものであり、能力・許可・義務・非認識様熊的 (不) 可能性・非認識様熊的必然性・意志・自発性などの概念を表す。

2. 以後、「核意識分析」という用語を用いる場合は、Groefsema (1995) の「統一的意味に基づく分析」と同義で用いる。

3. Sperber & Wilson (1986) は関連性の原理を次のように定義している:

Every act of ostensive communication communicates the presumption of its own optimal relevance. (Sperber & Wilson (1986: 158))

この原理は「総ての意図明示的伝達行為は、同時に、その行為が最適の関連性をもつことを自動的に伝達している。」ということ述べたもので、概略、発話を行うということは、同時に、発話者がその発話を聞き手にとって最大限に関連性があるものとみなしている旨を伝達することになる。ある発話が最適の関連性を持つというのは、その発話を聞いた聞き手ができるだけ少ない労力でできるだけ多くの文脈効果 (contextual effect) を得ることができる場合のことをいう。文脈効果には、発話内容と聞き手が持つ想定が推論して得られた想定である「文脈含意 (contextual implication)」, 聞き手が抱いていた想定をさらに強化する「想定強化 (strengthening)」, および聞き手が抱いていた想定を放棄させる「想定放棄 (contradiction)」の三種類が仮定されている。詳細は Sperber & Wilson (1986) を参照されたい。

4. 本稿では、Groefsema (1995) が扱っている英語の法助動詞 can, may, must, および should の多義的に意味の解釈については、紙幅の都合により、その一部を述べるにとどめる。

5. Matsui (1993) で見逃されていることの一つに、関連性理論が適用されるのは表面上の発話に対してではなく、発話の命題であり論理形式である、という適用レベルの問題があるが、これについては紙幅の都合により稿を改めて述べることにする。

参 考 文 献

- Ehrman, M. E. 1966. *The meanings of the modals in present-day American English*. The Hague: Mouton.
- Declerck, R. *A comprehensive descriptive grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Groefsema, M. 1995. "Can, may, must and should: A relevance theoretic account," *Journal of Linguistics* 31, 53-79.
- Klinge, A. 1993. "The English modal auxiliaries: from lexical semantics to utterance interpretation." *Journal of Linguistics* 29, 315-357.
- Kratzer, A. 1977. "What 'must' and 'can' must and can mean," *Linguistics and Philosophy* 1, 337-355.
- Lyons, J. 1977. *Semantics*. (Vol. 2) Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsui, T. 1993. "Bridging reference and 'topic' and 'focus'," *Lingua* 90, 49-68.
- 中野弘三 1993. 『英語法助動詞の意味論』東京：英潮社.
- Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English modals*. London: Longman.
- Palmer, F. R. 1990. *Modality and the English modals*. second edition. London: Longman.
- Perkins, M. R. 1983. *Modal expression in English*. London: Francis Pinter.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Basil Blackwell. (内田聖二ほか訳『関連性理論-伝達と認知-』東京：研究社出版)
- Tregidgo, P. S. 1982. "Must and may: demand and permission," *Lingua* 56, 75-92.
- 内田聖二 1994. 「関連性理論—その評価と展望」奈良女子大学文学部英語英米文学科『外国文学研究』第16号 pp.39-58.

## Theoretical Implications of Relevance Theory

Masahiro KATO

### ABSTRACT

The purpose of this study is to investigate the theoretical implications of Relevance Theory proposed in Sperber and Wilson (1986). I have examined two topics discussed in the framework of Relevance Theory: the core meanings of English modal auxiliaries developed in Groefsema (1995) and bridging reference analyzed in Matsui (1993). Although there still remain a few defects in the concepts proposed in both articles, I have concluded that Groefsema's analysis throws a fresh light on the disputes between the polysemy view and the core meaning analysis of English modal auxiliaries, and that I have argued for Matsui's approach to bridging reference assignment. I further argue that Relevance Theory, which is a theory of communication and cognition, has further applications to linguistic research, regardless of the division of sentence grammar and pragmatics.